

平成 25 年 3 月 25 日

# 南の風 34

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

33号の続きです。WJBLのファイナル3戦（73対65でトヨタの勝ち）を観戦してのディフェンスの印象です。

まず印象に残ったのは、トヨタのJXのセンター陣に対するディフェンスです。3線の状態から相手のポストアップに反応する動きがよかったことです。3線のポジションから相手のポストアップに対して、ディナイ気味にトルソーでコンタクトしてコースを潰し、リアターンしてフルフロントで付くということができていたことです。JXのセンターは簡単にボールが持てませんでした。（若干JXのセンターが淡泊な面もありましたが。）さらにトヨタはボールマンディフェンス（1線）のプレッシャーを強めて、いいパスをインサイドへ入れさせませんでした。パスコースを簡単につくらせなかったわけです。ポストディフェンスと1線のディフェンスの連動が、JXのオフェンスに微妙なタイミングのズレをつくる結果となりました。このトヨタのディフェンスは、ミニバスにも大変参考になるものでした。

次に印象的だったのはトヨタのボックスアウトです。特に3線、あるいはオフェンスとの距離が離れた場合のスクリーンアウトがしっかりできていました。オフェンスとの距離が離れた場合は、ショットがあった時に、相手のリバウンドの跳びこみに、まずコンタクトすることが重要です。コンタクトしてフロントターンからスクリーンアウトです。リアターンだと相手にサイズがある場合、押し込まれてしまいます。相手が棒立ちならそのまま自分がリバウンドに行きます。トヨタの選手は最後まで徹底してボックスアウトを続けていました。JXのセンター陣のオフェンスリバウンドの確率が、1・2戦に比べて悪かったのはこういった理由からです。

ついでに気になったことを書きます。JXのセンター陣がスクリーンアウトされた時に、何もなす術がなかったことです。通常スクリーンアウトされた場合、半身になって身体をロールして外すか、フェイクをかけて反対から跳び込むかします。しかし、第3戦に限って言えばそういったプレイは見られませんでした。さらに言えば、スクリーンアウトされてボールを取られた場合は、諦めて自陣へもどるだけではなく、速攻を封じる努力（タイトについてドライブやパス出しを遅らせるなど）をすべきです。

最後にトヨタの2対2のアウトサイドスクリーンに対するJXのディフェンスについて書きます。アウトサイドスクリーンからのすべてのプレイを遮断することは不可能です。ならば相手にやられてはいけないプレイは何かを、チームとして明確にすることです。今回の3戦なら、アウトサイドスクリーンを使って、ドライブからのアウトナンバーのプレイ、あるいはコーナーからのスリーポイントシュートではないでしょうか。これを阻止するには、ボールマンのアウトサイドに行くレシーバーの動きの察知が大切です。2線のディナイから、自分の相手がボールマン側への動きを見せた時、ファイトオーバーのつもりで激しく付いていき、ボールマンがそばにいたらアームバー（進行方向を片手で払いながらコースをつくりファイトオーバーする）を使ってすり抜けます。動きが遅れた場合は、ボールマンのディフェンスに声掛けして全速力でスライドするか、スイッチするかします。いずれにしても声掛けと読み、予測が不可欠となります。それではまた次号で。